

研究会・シンポジウム報告

2013年11月2日(土) シンポジウム報告

テーマ：【関東大震災90周年記念】

大正デモクラシー—もう一つの可能性—吉野作造・賀川豊彦・末弘厳太郎をめぐって—

報告者：大川 真氏(吉野作造記念館副館長)

戒能 信生氏(東駒形教会主任牧師)

コメンテーター：内藤 光博(本学法学部教授)

司会：古川 純(本学名誉教授)

共催：NPO法人現代の理論・社会フォーラム

時間：14時00分～17時30分

場所：専修大学神田校舎7号館731教室

参加者数：90名

報告内容概略：

本年2013年は、関東大震災(1923年、大正12年)から90周年にあたる。このシンポジウムの目的は、第一に、震災90周年の節目に際し、震災直後の被災者救援活動を恒常的な「セツルメント」に発展させた、吉野作造、賀川豊彦、末弘厳太郎、穂積重遠の4人に焦点を当て、彼らの救援活動と「セツルメント」の創設に果たした役割を検討すること、第二に、「大正デモクラシー」という時代背景の中で彼らを支えた思想を検討すること、第三に、「大正デモクラシー」とは何か、そこにはどのような可能性がはらまれていたのか、さらには、震災後に勃興してきた無産階級運動は、果たしてそれを正しく受け継いだのかを検討することにあつた。

大川報告では、「吉野作造の『民本主義』再考-吉野の考える民衆の政治参加とは-」と題して、政治学者の吉野が唱えた「民本主義」の背景をなす思想とその内容を紹介した上で、憲法学者・上杉慎吉や美濃部達吉、哲学者・井上哲次郎などの見解を紹介し、吉野の一般大衆への政治教育と政治運動に対する考え方について報告がなされた。

戒能報告では、「関東大震災救援活動における賀川豊彦、吉野作造、末弘厳太郎」と題して、吉野とキリスト者・賀川豊彦との出会いと吉野に対する賀川の思想的影響、民法学者・末弘厳太郎と賀川との交流を通して「セツルメント」が創設されたこと、さらには、無産政党合同運動と賀川と吉野の関わりなどについて報告がなされた。

これら報告をうけての内藤のコメントでは、震災救援活動と「東大セツルメント」の創設を主導した末弘と同じく民法学者の穂積重遠の法思想の分析を通して、大正デモクラシー期の「大学の社会への拡張運動」との関わり、両者の社会学的法学の展開と震災救援活動の関わりについて報告がなされた。

報告後のパネルディスカッションでは、大正デモクラシーの政治的・法的思想が、関東大震災を機に現代に続くボランティアによる震災救援活動を生み出したのではないか、大学が社会の目を向け始めたのではないか、大正デモクラシーの思想が無産階級に正しく受け継がれたか否かなど、多くの問題点について議論が集中した。

記：専修大学法学部・内藤光博

2013年 11月16日(土) シンポジウム報告

テーマ: 「J・F・ケネディの遺産」

報告者: 土田 宏「ケネディ研究の現状と課題」

—山本和隆著『ケネディの遺産』(志學社)を巡って—

山本和隆「ケネディ暗殺の背景」

濱賀祐子「ジャクリーヌの歩んだ道」

時間: 14:30-17:30

場所: 専修大学神田校舎1号館13A会議室

参加者数: 25名

報告内容概略:

今回のシンポジウムでは、「J・F・ケネディの遺産」と題し、暗殺事件から50周年をむかえる本年11月22日を前に、米国大統領J・F・ケネディの政権運営とその業績、ケネディ研究の近年の動向と課題、いまだに多くの議論を呼んでいるケネディ暗殺事件、並びにファーストレディとしてケネディを支えたジャクリーヌ夫人に焦点を当て、それぞれ報告を行った。

土田氏の報告では、ケネディ大統領の政権運営に関する研究はキューバ危機、「進歩のための同盟」など、概してケネディ政権期に大きな注目を集めた領域を対象とするものが多く、それらの領域で多くの成果があることを指摘する一方で、山本氏の著作は「宇宙政策」に焦点を当てており、当該政策が、ソ連と対抗するうえでの軍事技術の向上促進とともに、「アメリカの威信」の回復の役割も担っていた点に注目した。

山本氏の報告では、暗殺後50年間で一貫して議論的となり続ける暗殺事件の背景について、ウォーレン委員会及び「ウォーレン報告書」に焦点を当て、ウォーレン委員会はそもそも事件の真相を調べるためではなく、大統領暗殺事件によって混乱したアメリカ社会を鎮めるために報告書を作成したことを述べた。

最後に、濱賀氏は、ジャクリーヌ夫人の生い立ちから死去までを概観し、その中で夫人のファーストレディとしての活動を分類し、歴代ファーストレディたちの活動と比較した。そこでは、ジャクリーヌは当時ファーストレディとして高い人気と注目を集めたものの、生い立ちの経験から本人は大統領一家を支え、守ることに重点を置き、ファーストレディ評価の基準となる社会活動についてはそれほど熱心ではなかったことを指摘した。

フロアからは、ベテラン議員でかつてケネディの上司でもあったL・ジョンソンを副大統領に指名したが、ケネディはジョンソンをどのように評価していたのか、公民権法案提出に際して、経験も知識も政治力も豊富であったジョンソンを蚊帳の外に置いたのはなぜだったのか、2039年に公開予定の暗殺事件に関する資料は新たな手掛かりを与えるか、など活発な討論が交わされた。

記: 専修大学法学部・末次俊之